

【自主自律と文武両道の伝統】

創立以来これまでに母校を巣立った3万9千名余の同窓は様々な分野で活躍しているが、強いて言えば「先生」と呼ばれる職業の比率が高い。小中学校から大学まで文字通り先生をされている方のほか医師や弁護士、弁理士、会計士等々、組織的な縛りが比較的緩やかで自由度の高い分野である。生徒については、運動部入部率が毎年60%を超え、地域各高校の平均30数%の倍近く、多くの運動部が近畿大会や全国大会出場の実績をもつ。文化系を含めると生徒の90数%がクラブに所属して課外活動に取り組み、他方、進学面では公立高校として地域ナンバーワンの実績を保ち続けている。

そこから見えてくるのは、他者の束縛を嫌うが、自ら選んだ規律には従う、創立以来の自主自律と文武両道の伝統である。

こうした母校の伝統形成に初代校長・有馬純臣は大きな役割を果たした。

【柔道家でもあった初代校長】

初代校長・有馬純臣は、元治元年（1864）越前丸岡藩藩士の家に生まれ、明治維新で東京に移り住んで学習院に学び、卒業後学習院教授を務めたのち明治25年旧制・第五高等学校（現熊本大学）教授に転じ、明治28年弱冠31歳で本校初代校長に就かれた。

その人となりについて、同窓会誌『三丘』3号の座談会で1期生の鉛市太郎（当時阪大教授）は、「家にあつても袴を脱がず、威厳貫すべからざる人だった」と語る。さもあれ、有馬純臣はキリシタン大名として有名な肥前有馬氏の末裔で、柔道の創始者・嘉納治五郎の高弟で柔道四段、学習院在職時は海軍大学校嘱託柔道教授を兼ねた柔道家でもあった。

講道館に残る創設時の入門者誓文書の6番目に有馬純臣の署名がある。ちなみに7番目は小説『姿三四郎』のモデルとなった志田四郎（後の西郷四郎）である。また、純臣入門に先立ち本家嫡男で当時14歳の純文が入門しており、年長の純臣は純文の守り役として入門したと思われる。のちに純文は本家当主として子爵を嗣ぎ、東宮侍従等を歴任、講道館の有力な後援者となった。

講道館の創始者である嘉納治五郎は、五高や一高（現東京大学教養学部）、東京高等師範（現筑波大学）の校長を歴任した教育者であり、大日本体育会（現日本体育協会）の結成に奔走して初代会長に就任、さらに東洋人初のI.O.C委員としてオリンピックの日本招致を実現した国際的なスポーツ指導者でもある。そして、何よりも知育偏重を戒め、徳育・体育の重要性を説いた。

明治24年五高の校長として熊本に赴任した嘉納治五郎は、翌年に道場「瑞邦館」を開設し、指導者として純臣を東京から招き寄せた。その3年後、純臣は本校の初代校長として堺の地を踏んだ。

有馬校長は結核を患って勤務は休みがちであったそうだが、前出座談会で鉛市太郎は、「寒稽古だけはよく出席された」と語る。当時の寒稽古について創立百周年記念誌『三丘百年』は、「柔術は、毎年1月8日より同31日まで寒稽古と称し、毎日午前4時より7時まで校内道場において練習がなされた」と記すが、1期生の栗原薫（当時新大阪土地専務）は、「校庭で豚を棒で殴り殺し、ブタ汁にして食ったことがある」と語っている。

【猛烈な寒稽古と成果】

青年時代に柔術諸流と対戦した純臣ならではの荒稽古だが、その結果、明治33年の第1回府下中学校連合運動会柔術の部に出場した2選手は全勝、第2回大会でも柔術団体の部で3戦全勝した。

【課外活動の奨励】

一方で純臣は、開校とほぼ同時に「校友会」を結成し、柔道に限らず種々の課外活動に力を注いだ。校友会には会計部、雑誌部、談話部、体育部が設けられた。雑誌部は会誌編集を担当、談話部は現今の弁論部である。体育部は、柔術、撃剣、短艇水泳、遊戯の4部からなり、短艇水泳部はボート部と水泳部を

母校草創期の人々



堺中学校1期生卒業記念写真

母校の前身・大阪府立第二尋常中学校は、明治28年(1895)1月11日付け大阪府告示第4号により正式に創設決定、2月21日付け大阪府告示第38号で決まった第三(現八尾高校)及び第四(現茨木高校)の両中学校と共に同年4月に開校した。

その後、明治34年堺中学校と校名を改め、昭和23年(1948)学制改革で新制・三国丘高等学校となった。創立120周年を間近にひかえ、今回は今日の母校をあらしめた草創期の人々を特集した。

内閣法制局長官、最高裁判所判事を歴任し、リクルート事件後に民間人ながら法務大臣を務めている。

【百科全書的知識人・鉛市太郎】

前出・鉛市太郎は、南北朝時代から続く老舗「鉛屋市兵衛」の長男として生まれ、三高から東大に進み、金属化学を学んだ。その後家業を弟の源之輔（堺中6期生、のち市兵衛を襲名）



氏に譲って化学者の道を歩み、満鉄中央研究所をへて阪大教授となり、産業研究所長、工学部長等を歴任、三丘同窓会では初代会長を務めた。

恩師の紹介で満鉄時代の鉛市太郎を訪ねた某氏は、「欧州留学から帰国する際、ドイツ人女性を娶って帰ったと恩師から聞き、さぞや端正な紳士を想像していたが、容貌魁偉なのに驚いた」が、「お会いした夜に食事に誘われ、杯を重ねるに従って談論風発、話題は古今東西あらゆる分野に及び、正に百科全書の知識人と言うべく、その人柄に一度で魅せられた」と回顧している。

合わせたような部で、後に水上運動部と改称されるが、当時はプールがなく、大浜海岸で練習を行った。本校は大浜に艇庫を建ててボート2隻を有し、夏は全生徒に水泳を奨励した。水泳奨励について校友会誌『茅渚の海』9号は、「南蛮貿易で栄えた堺という「海史上有名な地」に所在する学校であることによると記す。後年堺中は全国中等学校漕艇大会で優勝、一般中学校が商船学校や水産学校に競り勝った唯一の例をつくった。

【晩年の純臣】

嘉納治五郎の愛弟子として自ら稽古を着て道場に立ち、智・徳・体の総合教育を実践した純臣であるが、1期生の卒業を見ることなく、校友会誌『茅渚の海』創刊号巻頭に「されば諸子よ、勇武と勤勉をもって骨髄となせ」との言葉をのこし、明治32年栃木県立第一中学校（現宇都宮高校）校長に転じ、その後再び学習院教授に就くが、明治41年44歳で没した。

晩年は柔道理論の体系化に心血を注ぎ、数冊の著書を書いたが、明治38年刊行の『柔道大意』は初の柔道教本で海外でも英語版が出版された。また、没後刊行の『有馬柔道教範』は昭和10年代まで



有馬純臣の著書(母校資料室蔵)

ただ、第二次大戦末期に政府の科学技術審議会に名を連ねたため、戦後公職追放の処分を受け、同窓会長も辞した。

【建築の久野、製鉄の黒田ら】

建築家として大正から昭和前半に活躍した久野節、製鉄業発展に貢献した黒田泰造も1期生である。

久野節は、東大建築科から鉄道省に入つて初代建築課長を務め、中央諸官衙建築準備委員、大正天皇御大葬委員等を歴任後、設計事務所をおこし、多くの名建築を手がけた。主な作品としては蒲郡プリンスホテル（近代産業遺産）、千葉県立佐倉高校本館、近鉄宇治山田駅、本校旧三丘会館（以上3件は登録有形文化財）、南海ビル（南海難波駅・高島屋大阪店）、東武ビル（松屋）、三宮阪神ビル（神戸そごう）、近鉄阿倍野百貨店等がある。

黒田泰造は、東大応用化学科から官営八幡製鉄所に入り、「黒田式コークス炉」を開発してその後の製鉄業隆盛に大きく貢献したほか、鉾津を煉瓦や高炉セメント等に活用することに成功、今日の石炭化学・セラミック産業の先駆的役割を果たし、大日本製業協会（現日本セラミックス協会）の理事長、会長を務めた。

また、与謝野晶子が「君死にたまふことなかれ」と詠んだ晶子の弟・鳳宗七、エレクトーン奏者・松本玲子氏（高29回）の母方の曾祖父・芝山留次郎も1期生で、松本氏は祖父や両親など三丘四代の血脈を嗣ぐ。今回は草創期の三丘人の幾人かの足跡をたどったが、あらためて母校110年余の歲月の重さと深さを実感した。（SY記）

20数版を重ね、稀にみる名著と言われる。なお、三高から東大に進んだ前出の鉛市太郎は、「有馬家の元家老の屋敷に下宿したが、その家の当主から有馬校長の幼少時代の話をよく聞かされた」と語っており、堺中離任後も上京した堺中卒業生の面倒をみたことが伺える。

【1期生の驚異的な進学実績】

純臣が本校を去った翌春、彼の薫陶を受けた1期生は進学面で驚くべき実績をあげた。すなわち、卒業生32名のうち進学志望者は23名だったが、11名が一高、三高（現京都大）・五高の官立高校へ、5名が同じく官立の高商（現一橋大）・大阪高工（現大阪大）・岡山医専（現岡山大）へ、3名は陸軍士官学校、3名は私立の東京高専（現早大）・皇學館に、それぞれ進んだ。

当時の官立高校・高商等の合格率は平均40%強だったが、本校1期生は志望者17名のうち16名が合格、前出座談会で鉛市太郎は「おそらく日本一でした」と語り、『茅渚の海』4号は「実に全盛の珍事にして正に人をして驚嘆絶倒せしむべく（中略）前校長有馬先生に至るまで之を聞き等しく満足し給う所なるべし」と最大限の賛辞を連ねている。なお、卒業の春に涙を呑んだ一人も翌年大阪高工に進み、1期生の進学志望者全員が初志を達成した。

【総代を務めた高辻亮一】

当時の中学校では成績優秀者は特待生として学費を免除され、1期生では高辻亮一と鉛市太郎がその恩典に浴しているが、トップは高辻亮一で、卒業生総代として卒

業式で答辞を読んだ。



高辻亮一が私用したプロペラ用いたるファイナル

「た」と名前が挙がる高辻亮一は、南河内郡黒山村（現堺市美原区）にあつて菅原道真生誕地と伝承される菅生神社の神官の家に生まれ、一高から東大法科に進み、民法の大家である恩師・穂積重遠の薦めで明治生命に入った。そして明治43年、妻と生後間もない幼児を日本に残してドイツに留学、3年後に帰国するが病をえて大正10年世に知られることなく38歳の若さで早逝した。

その後90年余をへて留学時代に綴った日記を私家本『獨逸だより』として遺族が上梓したところ、日本経済新聞に取り上げられて反響をよび、日記に登場する寺田寅彦らの関係者に聞き取り調査をしたり関係資料を調べ、その結果を加えて昨年11月『ゲッツテインゲンの余光：寺田寅彦と高辻亮一のドイツ留学』と題して刊行された。第一次大戦直前のドイツ家庭の風景や日本人留学生仲間との交流を克明に記すが、寺田寅彦、林房吉、森田草平、吉川実夫、そ